

神秘の大樹シリーズⅡ

神秘の大樹

ヒロシマとつる姫

まえがき

神秘の大樹シリーズ第一巻では、偶然の一致といわれている現象を実体験に基づき、二五の話を取り上げて、エッセー風に考察を試みてきました。

心の世界は、とてつもなく広く深く、糠に釘のたとえどおり、手ごたえの無い厳しい世界であります。その厳しく難しい世界に学者でもない者が挑戦している訳ですが、一つ確かなことは、記述のすべてにわたって、実際に体験を通しての実例から浮き出す真実を体感できるのが唯一の強みであるということです。

心の世界の九九・九九パーセントが過去の心であり、また、歴史上の心でもあります。換言するならば、死の世界の現実は生きているということです。心の九九・九九パーセントの死の世界は生きているということなのです。〇・〇一パーセントという刹那の、今の心こそ自分の思いであり、死の世界の代弁者でもある訳です。

極言するならば、自分のいのちの中は生きている死の世界であって、魂は決して死ぬことのない輝く世界だといえるでしょう。肉体の死は生きている心の世界なのです。

そんなバカな、と思うかもしれませんが、実際に肉体を消した人々の心は魂となつて、この身の中で生き生きと輝き続けています。この身から魂を抜いたら、もぬけの殻になります。だからこそ、偶然の一致といわれる偶然の出会いや、出来事が、人々の暮らしの中で起きています。魂は、今の心を道明かりとして、縁結びの使者になつて活躍している訳です。

偶然はいのちの監視下で、魂と魂の結び合いの流れの一片がひよつこり地上に顔を出したというだけのことであり、また、それは延々と続く縁結びのドラマの流れの一片の息遣いということができましょう。

魂の息遣いとは、いのちの中から発してくる魂のメッセージなのです。

我々の心の奥底は、今の心の方向性に合わせて、即ち、今の心を道明かりの灯台としています。そして魂は縁結びの使者となつて活躍している訳です。魂は原子の光に乗つて飛び回っているのです。

思いは生きものだ

目的に向かつて飛んでゆく

縁エネルギーになつて飛んでゆく

思いが生きものなれば

花を求めて飛んでゆく

実を結ぶために飛んでゆく

思い強ければ強いほど

持続すればするほど

縁の花を咲かせて実を結ぶ

この世の空間は心の海だ

錯綜混交の海だ

見えたら一歩も歩けない

心に合った縁が待っている
心は縁結びの使者となり
人生喜怒哀楽の実を結ぶ

縁の使者となった魂たちは、原子の光に乗り、文字・数・色、その他、この世の媒体を介して訴え続けています。現れ方としては、偶然の一致であったり、夢であったり、時にはヴィジョンであり、閃きであり、霊言となって発言することだってあるのです。数ある魂の媒体表現の中で、「文字・数・色」の媒体を介し、魂は、肉体は消えても心は生きているのだ、ということを経験し続けているのです。

神秘の大樹シリーズ第二巻の本書では、おそらく人々には見すごされるであろう、それも、原爆ドーム前の、橋の上に落ちていた一羽の小さな折鶴が、天の扉を開く声なき声の現実の姿であったのです。肉体を消した魂からの切実なメッセージでありました。

現実の世にあつて、これほどの非現実の現実が万光の光を輝かせていたとは、神のみぞ知ることであつたか。これまでに、これ程の偶然の一致があつたでしょうか。否、共時性現象があつたのでしょうか。

死んで、ただ煙になって消えるものではありません。心は巖然として活躍しているという現実を誰が否定できませんか。「偶然」の二文字の便法は一羽の折鶴によつて、人の世から消えたのであります。

本書は、第一章心のつる草、第二章魂を乗せた一羽の折鶴となつており、一章は、いのちと心についての随想を用いて本題の二章へと導入しております。

二章は、小さな折鶴を通して「縁結びのメカニズム」を創作シナリオ形式にして、説話風に進めてまいりました。現実を生きる自分が、実は億万年から連なる亡き心たちの複合霊体（魂）であること、そして、死んで消えたのではなく、心は実に生き生きと輝いていて、自分を自分たらしめている原動力であるということ、そして、死んでも生きている心の世界を、一羽の小さな折鶴が明白に証してくれました。

その証しは、「文字・数・色」という媒体に乗って、原爆ドーム前の、元安橋の上で待つていたのです。

平成二三年初夏

著者 菅原 茂

神秘の大樹II 目次

| | |
|----------------|-----|
| まえがき | 1 |
| 第一章 心のつる草 | 8 |
| 第二章 魂を乗せた一羽の折鶴 | 25 |
| 第三章 おわりに | 144 |
| あとがき | 161 |

第一章 心のつる草

人間は、万物の霊長といわれていますが、そこに一つの疑問が湧いてくるのです。本当にそうなのであるのか？ 確かに想像を絶する知性を発揮するし、宇宙に人工衛星を廻し、基地をつくりだしてからもう久しくなりました。さらに、あの星、この星へと探査機を飛ばし続けています。

生活に欠かせないライフラインの基盤となる電気などには、核エネルギーを駆使していますが、その同じエネルギーは、軍事防衛と称される巨大な破壊兵器として、脅迫手段にも転じられます。人類が一巻の終わりの幕を引こうとしているかのように、私の目には映ってなりません。私たちが絶滅危惧種の筆頭になっていいわけはありません。

人間の能力は実に見上げたもので、その科学技術の向上は絶頂期に達しています。そのせいで、生活が浮雲に乗っているような感じもしますが、私たちが文化的生活の恩恵

を満喫しているのも事実です。

確かに、万物の霊長といわれて当然かもしれません。そうです。人間は、この世で最高の頭脳を持つ、知性の神様のような生き物なのです。

私は、思いついたことを「日々の心」として書き留めています。そこに次のようなことを書いていました。

「日々の心」四七六

いのちに優劣なし

生物に優劣なし

特性、あるのみ

特性を観察するとき

優劣は消滅する

そのとき

新しい自分の心に気づく

人類の優れた特性は

“知性”であり

闘争は知性毒であり

調和は知性愛であり

いのちの道は

大調和の道

このように、つれづれの思いを記録しているのは、自分の内面に向けたものであり、自己調和のための内なる魂の学習となっています。次のようなことも記しています。

「日々の心」四八二

母はわが子を宿した

そして

その子に母は宿る

母はわが子を生んだ

そして

その子の中に自分をも産み落とした

そして

その子の中で生きる母と父

その子の外にいる元の母と父

そして

その子の中にも生きている母と父

どちらも “本物” だ

そして

元の母と父は死んだ

そして

その子の中で育つ母と父

永遠に繰り返される母と子
子は母となり子を宿し母となり
子の中に生きる
死に変わり生き変わって続く魂
自分の中は魂の博物館

「日々の心」四八三

母の子宮の中では
いのちがいのちを
いのちたらしめるための
とつきとあか
十月十日
新しいいのちの再生世界
そこは母の「呼吸と食」以外は

立入禁止の聖域
また、いのちの道は一本道
口から入った食が
いのちをいのちたらしめるための一本道
食はいのちで
食以外は立入禁止
一呼一吸天の気
一食一排地の気
天地の気はいのちの食
食はいのちの呼吸なり

万物の霊長といわれる人間ですが、次元を生きる原点に引き戻して考えるとき、果たしてどうでしょうか。もしもこの大自然界に放り出されたときのことを想像するだけで、何もかもギブ・アップすることばかりです。

人間が優れているのは「知性」という特性があればこそです。そして、優れているの

は、単に人間社会でのことにすぎないのだと気づきます。

単身で空を飛ぶことはできないし、オリンピックのどんな競技の一流選手でも、猿やチーターや象やライオンやイルカたちに太刀打ちできないのは先刻承知のことです。裸一貫では成すすべもありません。優劣ではなく、その種が持つ「特性」という、いのちの平等に立たなくては比較などできようがありません。優劣は人間社会でのことであり、他の生き物が人間より、すべてにおいて劣るという見方は、白紙に戻さなくてはなりません。

人間は、いろいろなものを考え、何かをつくり上げるといふ創造力にかけてはものすごい能力を発揮しますが、これを、万物の霊長というより、人間に与えられた一大特性と考えてみたいものです。

特性である「知性」の活躍で、人間はとてつもなく広大な文化圏をつくり出しましたが、その、量的資産と同様に「心の資産」をも積み上げてきました。この心の資産を「魂」と呼んでみたとき、人間の魂は、私なりに考えれば、人間の遺伝子(DNA)とイコールに近いのではないかと思うのです。

人類の心と行動のすべてが、一つ一つの細胞に組み込まれている遺伝子そのものの、大部分を形成しているのではないのでしょうか。これについてはもちろん、人類という種に到達するまでの、果てしない生物の精神体である「心性」のルーツに溯らなければなりません。人類になってからに絞って考えてみるならば、人間が人間であるための、心と体の生きざまの記憶量が「遺伝子化」したのではないかと考えてしまうのです。

ナンセンスも甚だしいとそしりを免れないでしょうが、今は、ヒトゲノムが解明されている時代です。遺伝子の数は約2万といわれ、その中で、確かに意味が解明されている遺伝子は全体の2%以下に過ぎず、大部分は何のためにあるのかさえわからないというではないですか。もしかするとそれこそ「魂のDNA」なのではないか、これは、ずぶの素人だからおそれもなく考えつくことかもしれません。

いずれにしても、人の心の記憶蓄積量は、他の生物たちと比べたら、とんでもなく膨大な量になると思うのです。

一人ひとりのいのちの中は、魂の巨大なダムになっています。その魂が、いのちの光の柱に絡み付くようにして生き続けています。

いのちの道は一本道です。大調和の光を放つ一本道です。そのいのちの一本道の光の中で、人間の魂は正しい調和安定の波動に見据えられ、かつ、監視・コントロールされ

ているのです。

「日々の心 四八三」で記したように、母の子宮の中は、母の「呼吸と食」以外は絶対立入禁止の聖域なのです。いのち自身がいのちを育てている聖域なのです。その十月十日とおかといわれる平均期間内で、人が人として再生します。このとき、圧縮し、凝縮された魂も同時に再生の道に入ります。

その間、母が摂取する「呼吸と食」以外は立入禁止の、いのちの聖域である「子宮」の中で、引き継がれてきた魂のすべても、この世の夜明けを待つて、新生児として誕生します。肉体の誕生は魂の誕生でもあります。

子宮の中では、母がいただく大気の呼吸と食物の摂取によって、

いのちによる

いのちたらしめる

いのちのために

宇宙根源からの生命エネルギーで

ごくごく自然に

肉体と精神の

一元一体の

いのちの姿になるために

その流れを続けます

ひたすら母親は、呼吸の気を送り、生命元素の「食」を送り続けている生命奉仕です。十月十日とおかは、立入厳禁聖域となる子宮の小宇宙世界であり、宇宙意志のカプセルでもあるのです。

そして、機が満ちてこの世に出生した新生児は、やがて、一体のいのちとして、その骨格が完了するのは、男性でだいたい一八歳、女性で一五歳少女に達してのこと。骨の数、新生児で約三〇〇本、最終的には全部で二〇六本とおかになるといわれています。

一生命体が完成するまでの原形は、十月十日とおかの、子宮という小宇宙世界で、その基盤ができあがるわけです。母親の口から入った「食」が胃に入って、十二指腸に入り、小腸に入り、分子・原子次元まで分解された物が吸収細胞によって取り込まれ、全身に届けられます。そこでいのちの新陳代謝が起こり、生き生きと輝く命となります。そして、

子宮の胎児が育ちます。

胎児が出生するまでの、この完璧ないのちの組み立ての仕組みは、「天のご意志」というほかありません。

こうして積み上げられてきた人間の魂は、成長とともに、この世のあらゆる心身環境を取り入れながら、扉を一つ、また一つと開いていくこととなるでしょう。

いのちの監視の中にある魂は、億万年の心の集団です。魂に新旧はないと私は思っています。昔も今もありません。百年前も、万年前の魂も、すべて「今」に生き生きと輝くのです。多次元立体ではなく、一次元の、一面一体で同時再生の世界です。

浮き上がる心の条件さえ整えば、昔も今も越えた次元の「今」に生きてくる世界なのです。魂は活火山と同じです。条件を待つて噴き上がります。その条件は、今の心でお膳立てをしています。

「今の思い」という心も亡き魂の心も、すべて、このいのちの中に在ります。いのちの「原子」となって生きているのです。

大地を見てみれば、種を蒔いてもいないのに、いつの間にか思い思いに芽を吹き出した草木がずんずんと丈を伸ばして花を咲かせ、実をつけ、種を育てます。太陽や水など

の自然の発芽環境条件を待ちつづけて、いのちに最もよい自然条件の下で顔を出してきているのです。生命波動の共振共鳴の現象です。

たとえ、何も無い荒れ地でも芽を出し始める草木たちの、そのいのちを、自分の中の魂にも重ね合わせてみることができるといふものです。自分のいのちを、「心の大地」に見立てたとき、その心の大地から多くの魂の芽が、生きる条件を待ちながら、顔を出そうとしています。

それを「心のつる草」にたとえるなら、各人の心の大地から育ち始めている心のつる草は、その人の「縁結びの使者」となって、人生に大きな力となって働き続けることになりましょう。

この世界の人間のいるところ、どこにでも、心のつる草が縁結びの一大センサーとなって交錯している事実は、目には見えない光の世界です。

心のつる草は光です。なぜ光なのかといえば、心は、生命組成である原子の反応から発する電磁波と考えるからです。

心は、いのちという光の下でしか生きられない宿命を背負っています。それゆえにいのちのは、一元一体二象体という現れ方をします。いのちは、元は一体のエネルギー体で

あつて、その中では、物質体と精神体という二大特性を持つエネルギーが融合一体となつて、動となり静となり、火となり水となり、中心には絶対静のゼロ磁場があると思うのです。その一体の中に二象体のエネルギーを容れているのが、私の考えるいのちの実体像なのです。その“二象体”は、物質体（物性Ⅱ肉体）と、精神体（心性Ⅱ心）という現れ方であり、その“精神体”の部分から発する二次的生命に当たるのが心であると考えています。いのちのエネルギーは、そのような実体像を持つ、宇宙絶対調和力（一大調和ご意志）であると思えば、心というのは常に、生命エネルギーの調和安定に引き戻される宿命の下でしか存在できないということになります。

さて、いのちの大地に根差した心のつる草は、出会いを求めて飛びかっています。光の原子が“意志”を持った光のつる草となつて、縁結びのセンサーとなつて、時空なき天地を自在無限に往来を重ねている姿こそ、現実社会であるといえましょう。

いのちの働きは“ご意志”の働きだと私は考えますが、そのご意志は、目に映るわけではありません。実際にどのようなようにして、そのご意志（いのち）が、縁結びのつる草となつて飛び交っているのかといえれば、人間社会の「表現媒体」にひびかせて、つまり、共振共鳴した共時性現象（通称Ⅱ偶然の一致）として、現実として目に映して促しているの

ですが、多忙な現代人はこういったことにはあまり見向きもしないようです。

魂が知らしめる「表現媒体」とは、人類文明の「三種の神器」だと私は考えています。それは、文字・数・色による、声なき声の現実の表現形態で、そこに真実が込められています。声なき声の魂は、目に見える表現形態に現実化して生きてきます。

「いのち」を「ご意志」といいましたが、それは表現であつて、現実の共時性現象下では、文字^{もじ}霊^{たま}・数^{かず}霊^{たま}・色^{いろ}霊^{たま}という媒体表現が、正しいでしょう。共時性現象（通称Ⅱ偶然の一致）による現実の魂の意志表現は、文字霊・数霊・色霊によって、可視現実の表現となっているのが、これまでの体験を踏まえてわかつてきたことです。

魂の表現形態が、現実社会の中で実際に現象化していることは、共時性現象体験から考えても疑う余地がありません。それは事実です。

かつては、「魂の叫びが聞こえないか……」などと先人たちから発破^{はつぱ}をかけられたものですが、まともに受け止めることはありませんでした。ところが、人生七七年も生きてきて、さらに二十数年も意識を内面世界に向けるようになってからは、次第に先人たちのいう“魂の叫び”が五感で感じられるようになってきました。魂の表現媒体としての「文字・数・色」のひびきによって、はっきりと理解範囲に入ってきたのです。

偶然といわれる出会いの不思議や、縁結びの不思議は、単なる一過性の話として済まされてきたのではないだろうか。

一瞬の感動的出会いやご縁の結びは単なる表面的感動にとどまって、それ以上に結び付けるものではなかったのが、年を経てから過ぎた昔の追憶の話として、例えば、

「あのとときあのことになかったら今頃私はどうなっていたんだろうか…」

「あのとときの一瞬の出会いでこうしてお前と一生暮らすことになるなんて…」

「あのとときあの人の一言で人生がらりと変わった。あれで目を覚ましたから今幸せなんだ…」

などなど、人生転換にあれやこれやと心の方向性を変えてきた出会いの縁は、多くの私たちの経験知となっているものでしょう。

それらはすべて偶然の出来事として見過ごされてきました。毎日の生活そのものが、何もかも出会いであり縁結びであり人生の方向性を秘めていたとは、なかなか気づかないものです。

心に残る衝撃的な出会いだけが出会いのご縁ではありません。家を一步も出なくても、私たちは多くの出会いの中に生きています。この世の情報がすべて出会いであり、縁結

びのセンサーに触れているのです。本を読んで感動して人生の方向性が変わることだつてあるでしょうし、テレビなどの視覚に訴えるデジタルな情報からでも、心を大きく動かされることは結構多いものです。五感で受けるすべての物が心のセンサーに触れるものであり、いわば、生活そのものが出会いの縁結びの場面であるといえます。

人生に三度の転機があるとよくいわれますが、縁結びには、「役縁と本縁」があると私は考えています。電車に例えていえば、各駅停車が「役縁」であり、下車駅が「本縁」ということになりましょう。人工衛星の打ち上げならば、一段目、二段目、三段目の推進ロケットが「役縁」の働きで、切り離された衛星が「本縁」の働きに例えられます。

人生のターニング・ポイントとなって、目の前の全景ががらりと変わるような出会いのご縁が本縁です。別世界に打ち上げられた衛星に当たるのが本縁で、電車なら、各駅停車で停まる短いスパンの出会いが役縁であり、下車駅が本縁であると考えたらよいと思うのです。

私が体験した共時性現象の中でも、劇的な人生転機をもたらした現実の出会いがありました。まさしく、人生の「本縁」に向けての方向性を秘めていたものでした。